

興味深い経過を辿った悪性腹膜中皮腫の2例

社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院

放射線科 平尾 幸一, 堀上 謙作, 末吉 真

臨床工学部 中島 喜代子, 上原 かをる, 川中 温美, 福田 龍太, 高見昇吾

病理学的に診断された悪性腹膜中皮腫（肉腫型1例, 二相型1例）の2例について報告した.

肉腫型の1例は, 他院で行われた化学療法（CDDP+PEM: 4クール）に抵抗性で増大傾向にあったダグラス窩腫瘍が, 温熱療法を2クール併用したところ, 腫瘍が縮小した. また, 腎機能低下のためCDDPを含まないレジユメに変更してから, 腫瘍が再増大したことから, CDDPを併用した温熱化学療法が有効であると考えられた.

二相型の1例は, 温熱化学療法（CDDP+PEM）を27回行ったところ, 1年10か月後には omental cake と腹水が消失したが, 腎機能低下により化学療法が中止され, 温熱療法を単独に変更されてから, 徐々に腹水が増加し癌性腹膜炎が再発し, 魚骨による小腸穿孔で亡くなられた.

全身化学療法によるMSTは, 文献上, 4.8–12.1ヶ月であるが, 今回の二症例の生存期間は, 肉腫型が2年4か月, 二相型が5年8か月という長期生存が得られ, 化学療法に温熱療法を併用することが非常に有効であると考えられた.